

〔香坂 1952〕：香坂順一「廣東語の研究—モリソンから趙元任へ—」『人文研究』（大阪市立大學）3-3, 1952年3月, pp.35-63。

〔詹・張 1987〕：詹伯慧・張日昇（主編）『珠江三角洲方言字音對照』（珠江三角洲方言調查報告之一），香港，新世紀出版社，1987年。

西暦1900年に記録されたナムイ語の語彙

—H.R.Davies 著 YÜN-NAN 所載の西南中國の民族語彙研究 1—

池 田 巧

は じ め に

西南中國の雲南省から四川省の西側を経て青海省と甘肅省へつづく帯狀の地域は、險しい山岳地帯と複雑な河川が連なり、その間に廣がる平野部には主として Tibeto-Burman 系の諸語を話すさまざまな少数民族が居住することから「川西民族走廊」と呼ばれている。話される言語の数は15種以上にのぼり、その複雑さはさながら中國のコーカサスと言ってよい。しかし同地域の言語史を研究するには、資料に大きな制約があり、獨自の文字表記を發達させたチベット〈藏〉語、イ〈彝〉語（ロロ〈俅僰〉語）、ナシ〈納西〉語（モソ〈麼些〉語）が豊富な民族語文獻を有するのを除くと、その他の言語の歴史について知り得る文獻記録はほとんどない。唯一まとまった記録としては明清期に編纂された塞外言語と漢語の對譯語彙集の《華夷譯語》のうち、清の乾隆13年（1748年）以降に一種のアンケート調査により作成された〈川蕃譯語〉と呼ばれる一連の資料があるのみである⁽¹⁾。

- (1) 〈川蕃譯語〉と呼ばれる資料には9種類あり、それぞれ〈西蕃譯語〉に類する名稱が付けられている。卷頭には當該言語の分布地を記載し、あらかじめ印刷された740語の漢語の共通語彙項目に調査對象の言語の語彙を音譯漢字とチベット文字で記入して作成した語彙集である。中國に所藏される〈華夷譯語〉を調査した馮燕〈“華夷譯語” 調査記〉（《文物》1981年第2期）では、卷頭の分布地域に關する記載に基づき記述された言語を推定したが、川西走廊諸語の調査が進むにつれて、記述された言語がしだいに明らかになってきている。

	馮 (1981)	西田 (1990)	研究書
《川一》	藏語	チベット語カム方言	
《川二》	待定	白馬語方言？	
《川三》	嘉戎語	ギャロン語	西田 (1973)
《川四》	達布語	白馬語	西田 (1990)
《川五》	羌語？	アルス語西部方言	
《川六》	待定	チベット語カム方言	
《川七》	魚通“貴瓊”語？	チベット語カム方言	
《川八》	小西番語	アルス語中部方言（ドス語）	西田 (1973)
《川九》	普米語？	チベット語方言？	

〈華夷譯語〉については、西田龍雄『西番館譯語の研究』（松香堂1970年）、『俅僰譯語の研究』（松香堂1979年）、『多讀譯語の研究』（松香堂1973年）『白馬譯語の研究』（松香堂1990年、孫宏開との共著）などを参照。

いっぽう同地域の言語の調査と分析は、1980年代以降によく中国の研究者の報告が現れ、記述言語学の方法により同地域に分布する諸言語の基本的な様相が徐々に明らかになってきた。その類型構造の研究は、現代口語や文献資料から得られるデータのみではこれまでよくわからなかったチベット語の動詞に付属する接辭の文法的機能とその起源に關して、また過去の文献記録しか持たない西夏語の文法構造の解明に新たな光を當ててきている⁽²⁾。

しかしながら「川西民族走廊」の諸言語の多様性に比して研究者の数は限られており、今なお未解明の問題も少なくない。また急激な現代化の波が山間部にも確實に擴がり、經濟發展のもたらす反面的效果として貴重な民族遺産であるこれらの少數言語を消滅の危機に迫り込む傾向もないとは言えない。近代から現在に到るまでのわずか100年ほどの間にも同地域の言語分布圖は大きく變化した。各言語の詳細な記述研究と同時に急速に變化しつつある社會組織と生業形態、民族相互の交流關係や地理分布などを視野に入れた社會言語學的な調査が緊急課題となっている⁽³⁾。

1 19世紀の宣教師と探檢家の記録

こうした資料的制約と社會狀況の變化を考えるならば、19世紀末から20世紀初頭にかけて西南中國を訪れ、民族學的觀察を行なったヨーロッパの宣教師と探檢家の記録は、言語に關するさまざまな情報も含んでおり貴重である。従來これらの記録は、各民族が自らの言語を記録した民族語の文献資料や現代の言語學者による記述報告に比べ不正確で信頼性に缺けるとされてきた。確かにその精度には問題があるにしても、語形をローマ字で表記している資料は、清代の〈西蕃譯語〉の漢字音寫と現代の音聲記號による精密な記述報告の間を繋ぐものとして参照するだけの價值がある。現代語の記述資料が豊富になり比較對照が可能になった現在、この種の資料の精度と記述の方法についても検討し得る條件が整ってきたと言えよう⁽⁴⁾。

(2) 黃布凡〈藏緬語動詞的趨向範疇〉(《藏緬語新論》中央民族學院出版社1994年, p.133—151), 西田龍雄「西夏語動詞句構造の考察」(『西夏王國の言語と文化』岩波書店1997年, p.206—242)

(3) 黃布凡〈川西藏區の語言關係〉(《中國藏學》1988年第3期)は、これらの言語の使用範圍の縮小の趨勢について具體例を擧げて述べている。

(4) 西南中國の調査記録のうち言語についての情報が比較的豊富な資料には、次のようなものがある。

Hodgson, B. H. 'Sifan and Horsok Vocabularies.' *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 22: 121—151, 1853.

Baber, E. Colbone. *Travels and resarches in Western China.*

Supplementary papers Vol.1. Part I., Royal Geographical Society, 1882.
1971 (R) Ch' engwen Publishing Co. Taipei.

1909年に刊行された H. R. Davies 著 YÜN-NAN は、イギリス陸軍関係者によって1894年、1895年、1898年、1899～1900年の4回にわたって行なわれたビルマから雲南に至る鐵道敷設のための豫備調査旅行の記録であるが、當時としては最高水準の近代的な測量技術を使用し、地名や地形など自然環境の記述の正確さに加え、地域に居住する民族に関する卓越した観察記録として、西南中國の民族學研究者には必讀の文獻となっている。同書が歓迎されるいまひとつの理由は、旅行記の本文とは別にまとめられた全9章構成の付録において、自然、住民、氣候、鐵道路線、民族といったテーマごとにさらに詳細な體系的論述を行なっていることにあり、なかでも第8章「雲南の少数民族」は、言語に基づく民族間の系統分類と取材に基づく簡要な民族誌を含み、資料的價值が高いとされている⁽⁵⁾。

言語の系統分類の研究としてこの付録第8章を見るならば、その後の資料の蓄積と研究の進展によって大幅な修正を必要とし、今日では残念ながら研究史の一資料として以上の意味を持たない。しかし、その内容を詳細に検討してみると、他書からの引用ではない Davies 大佐自身による記述報告が含まれ、しかもそれは調査地點と日時が特定でき、當時の言語状況の一端を知り得るという點で同書の民族誌の記述同様、貴重な記録であることに変わりはない。語彙資料は卷末に VOCABULARIES OF MON-KHMER LANGUAGES OF YÜNNAN AND WESTERN SSÜ-CH'UAN と題する11言語169語の對照語彙表および TIBETO-BURMAN LANGUAGES OF YÜNNAN AND WESTERN SSÜ-CH'UAN と題する21言語182語の對照語彙表としてまとめられており、参照に便利である⁽⁶⁾。

d'Ollone, et al. *Langues des peuples non chinois de la chine*. Paris, 1912.

このうち、Mission d'Ollone の探検記録はつとに有名であり、この書はそのシリーズの1冊として刊行されたもの。貴州省、雲南省、四川省の少数民族語の45種類の方言を對照した語彙集で、收録語数は328項目、この種の資料のなかでは最大の集成である。また Baber の記録した Minyak の語彙は王靜如の「論四川羌語及彌藥語與西夏語」（《西夏研究》第二輯1933年）などに引用され、その後の研究に大きな影響を與えた。これらの資料については機会を改めて全面的に再検討したいと考えている。

- (5) Davies の原著は日本國內では稀覯本に屬するが、臺灣のリプリントと日本語譯が利用できる。

Major H. R. Davies *YÜN-NAN The Link Between India and the Yangtze*. Cambridge: at the University Press. 1909. (1970(R) Ch'engwen Publishing Co. Taipei.)

田畑久夫・金丸良子編譯 『雲南一インドと揚子江流域の環一』（古今書院1989年）

- (6) チベット・ビルマ諸語の語彙表には、(Written Tibetan, Standard Spoken Tibetan) Yünnan Tibetan or Ku-tsung, Lu-tzü, P'ümi Hsi-fan, Mu-nia Hsi-fan, Mo-so, Ssü-ch'uan Lo-lo, Mêng-hua Lo-lo, Li-so or Li-su, La-hu or Lo-hei, A-k'a or K'o, Ma-hei, A-ch'ang, Zi or A-si, Ma-ru, La-shi, Kachin, P'ön, (Written Burmese, Spoken Burmese) の21言語が對照されている。このうち比較對照のために引用された（ ）内の言語を除くと、Lu-tzü と Mo-so および A-k'a 以外はすべて Davies 大佐自身によって採集されたものであり、各採集地點と日時が明記されている。APPENDIX VIII TIBETO-BURMAN LANGUAGES. p. 351（日譯書：付録第8章426—427頁）。なお日譯本も卷末の語彙表は原著のものをそのまま影印して附載する。

本稿では Davies がその著書 *YÜN-NAN* のなかで Mu-nia の言語だとして記録した語彙を取り上げ、それが如何なる言語を記述したものを検証し、またその記録から知り得る当該言語に関するいくつかの問題について論じてみたい。

2 Davies が記録した Mu-nia の言語

YÜN-NAN 巻末のチベットービルマ諸語の対照語彙表には、“Mu-nia Hsi-fan”の語彙が収録されており、本文中にも Mu-nia についての言及がある。Mu-nia というのは「川西民族走廊」のうちミニヤコンガ山の西麓から南東麓にかけて居住するチベット系のエスニックグループのひとつであり、漢字では〈木雅〉と表記する。19世紀中頃にこの地を訪れたイギリスの外交官 Hodgson が初めて ‘Manyak’ の存在について報告し、のちイギリス人の Baber も民族學的な調査と考證を行ない ‘Menia’ の言語についても紹介した。彼らの自稱が歴史上の西夏王國を建てた民族名 Mi nyag (チベット語の轉字。漢字表記は〈彌藥〉〈彌諾〉など)に對應することから、西夏の末裔ではないかと考えられ、数々の論考が著わされている⁽⁷⁾。

Davies は、現在の行政区分でいう木里藏族自治縣の東端が九龍縣、冕寧縣と境を接する邊りに位置する No-po (現在の表記は〈保波〉、日譯本『雲南』では民國時代の地圖を参照して〈腦堡〉とする。漢語の西南官話では、聲母の [l-] と [n-] は區別されない。Davies の測量によると北緯28度20分、東經101度40分の集落)にて Mu-nia という部族と出會い、その語彙を採集した。

附録第10章の旅程を見ると、Davies 大佐一行が No-po に滞在したのは、1900年3月10日と記されており、翌11日には出發している。本文第30章の No-po 滞在時の記事ではその地の民族について、いずれも中國人からは Hsi-fan (西蕃)と呼ばれているが、Luning-ying (爐寧營) 地區の人々は Mu-nia で、No-po (保波/腦堡) の住民は自らを Lo-p'u と呼んでおり、明らかに異なる言語を話していたこと、また到着の翌日に Êrh-su そして Balamín と呼ばれる二人の新たな西蕃の部族に出會ったが、これらすべての部族から語彙を収集するだけの時間がなかったことなどを述べている。察するに Davies はこの短い滞在時間のうちに Baber のいう ‘Menia’、Hodgson のいう ‘Manyak’ に違いない

(7) ムニャ〈木雅〉の民族については、Hodgson, B.H. *Essays on Languages, Literature, and Religion of Nepal and Tibet*, London, 1874. (1991(R) Asian Educational Services, IND), Baber (前掲書), 王靜如(前掲書), 李範文《西夏研究論集》(寧夏人民出版社1983年), 格勒《論藏族文化的起源形成與周圍民族的關係》(中山大學出版社1988年)を参照。またムニャ〈木雅〉語については、黃布凡〈木雅語概況〉《民族語文》1985年第3期, 《藏緬語十五種》北京燕山出版社1991年に再録)が詳しい。

と確信した Mu-nia の言語だけを特に選んで記録したのであろう⁽⁸⁾。

しかし結論を先に述べるなら、Davies の記録した語彙は、かつて Hodgson と Baber が記録したムニャ〈木雅〉語とは同一の言語のものではなかった。現代中国の言語学者による西南中国の諸言語のデータと照合してみた結果、この語彙はナムズ〈納木茲〉Namuzi あるいはナムイ〈納木義〉Namuyi と呼ばれる言語のものであることが判明した⁽⁹⁾。

3 現代 Namuyi 語との対応

Davies が Mu-nia の言語として記録した語彙を巻末のリストから抽出し、現代ナムイ語の記述報告と対照した表を新たに作成した。収録語数は全部で182項目151語、配列は原著の順にならったが、対照と説明の便宜のため、各語に4桁の番號を付した。最初の數字は、各語彙項目が記載されている原著の対照語彙表の頁1～4を示し、小數點以下が通し番號である。もとの表では各語のイニシャルが大文字になっているが、それをすべて小文字に統一したほかは手を加えていない。対照する現代ナムイ語のデータは2種類、Namuzi (Huang et al. 1992) は《藏緬語族語言詞匯》(中央民族學院出版社, 1992年: 〈納木茲語〉は黃布凡と寧玉の執筆で、調査地は木里藏族自治縣保波鄉甘海子村) および Namuyi (Sun et al. 1991) は《藏緬語語音和詞匯》(中國社會科學出版社, 1991年: 〈納木義語〉は孫宏開の執筆で、調査地點は木里藏族自治縣保波鄉) に據っている。偶然ながら幸いにも三者の調査地點は同じ No-po 〈保波〉である。

対照の結果、Davies が記録した語彙は黃・孫の記述報告とかなりよく一致した。對應状況をわかりやすく提示するために、4段階のレベルに分け、それぞれ次のような記號で見出語の番號の横にマークを附しておいた。

◎: 三者の記述した語形がほぼ一致するもの

○: Davies の記録した語形が黃・孫の記述のどちらかに一致するもの、または Davies の記録した語形が黃・孫の記述した語のなかにそのまま語構成成分(形態素)とし

(8) YÜ-NAN, p. 231—232. (日譯書: 295頁, ただし誤譯が多いので、必ず原文を参照されたい)

(9) ナムイ語とは、四川省涼山彝族自治州の冕寧縣、木里縣、西昌縣、鹽源縣および甘孜藏族自治州の九龍縣などのチベット族によって話されている言語で、使用人口は約5,000人、九龍、木里一帶の住民の自稱はナムズ〈納木茲〉、冕寧、西昌、鹽源一帶の住民の自稱はナムイ〈納木義〉という。ナムイ語の記述研究には孫宏開〈六江流域的民族語言及其系屬分類〉(《民族學報》第3期 雲南民族出版社1983年 pp.163—179.) および黃布凡・仁增旺姆〈納木茲語〉(《藏緬語十五種》前掲書, p.153—173.) がある。

て含まれ、語形の對應に説明がつくもの

△: Davies の記録した語形と黄・孫の記述した語形との間で一部對應する部分 (形態素) を含むが、単語としては一致を見ず説明が困難なもの

? : Davies が全く異なる語形を記録しているもの、および現代語のデータがないもの

TIBET-BURMAN LANGUAGES OF YÜN-NAN
AND WESTERN SSÜ-CH'UAN

No.	English	*Mu-nia Hsi-fan	Namuzi (Huang et al. 1992)	Namuyi (Sun et al. 1991)
◎ 1.001	man (humanbeing)	ts'o	tshuo ³¹	tsho ³³
? 1.002	man(male)	mo-lu	phæ ³³ tɕ ¹⁵⁵	phæ ³³ tɕ ¹⁵⁵
? 1.003	woman	mbrö	z ¹³³ mi ⁵⁵	z ¹³³ mi ⁵⁵
? 1.004	child	la-k'ö	əɽ ³¹ lu ⁵³	əɽ ³³
? 1.005	father	a-ba	a ⁵⁵ da ³¹	ɛ ⁵⁵ dɛ ³³
○ 1.006	mother	a-me	a ⁵⁵ mi ⁵⁵	ɛ ⁵⁵ nɛ ⁵⁵
? 1.007	son	jö	zi ⁵³	z ¹⁵³
○ 1.008	head	or	kuo ⁵³ əɽ ³¹ (lu ³¹)	ko ⁵⁵ əɽ ⁵⁵ ly ³³
? 1.009	face	p'o-mi	ku ⁵⁵ (lu ⁵⁵)	ku ⁵⁵ ly ⁵⁵
◎ 1.010	nose	nyi-ga	ni ³¹ nga ⁵⁵	ni ³³ nga ⁵⁵
? 1.011	mouth	k'o-tza	mi ³³ ntshu ⁵³ / -nphs ¹⁵³	mi ³³ nphs ¹⁵⁵
◎ 1.012	ear	hen-pei	?hi ³¹ pæ ⁵⁵	hi ³³ pa ³³
◎ 1.013	eye	mie-lu	miæ ⁵³ lu ³¹	miɛ ⁵⁵
○ 1.014	hair	hon	kuo ⁵³ hũ ³¹	ko ⁵⁵ hũ ³³
? 1.015	tooth	shö	xi ³¹ / xə ³¹	xə ³³
○ 1.016	tongue	yi	ji ³³ ɬæ ⁵³	ji ³³ ɬɛ ⁵⁵
? 1.017	back	ye-tzör	dzu ³¹	dzu ³³ tɕɛ ³³ tɕɛ ³³
◎ 1.018	stomach	hen-pi	?hi ³³ bi ⁵⁵ / hi ³³ bi ⁵⁵	hi ³³ mbi ⁵⁵
? 1.019	leg	she-ga	ngu ⁵⁵ kæ ⁵³	bo ⁵⁵ ɾo ⁵⁵
(	foot		tɕ ¹⁵³ tɕ ¹³¹ / -kæ ³¹	ɕ ¹³³ kɛ ³³
○ 1.020	arm	la-ka	læ ³¹ ntshæ ³³ ntshæ ³¹	lɛ ³³ kɛ ³³
(	hand		læ ³¹ kæ ³¹	lɛ ³³
△ 1.021	hat	t'o-lo	kuo ⁵⁵ nthuo ⁵⁵	ko ⁵⁵ ntho ⁵⁵
? 1.022	turban	spur-tzö	kuo ⁵³ ji ³¹	ko ⁵⁵ ji ³³
(	頭帕		pha ³¹ ts ¹⁵⁵ (<帕子?)	
● 1.023	coat	ba-tsö	—	—
(	clothing		bæ ³¹ tshi ⁵³	bɛ ³³ tsh ¹⁵⁵
△ 1.024	trousers	lie-gu	li ³¹	li ³³
◎ 1.025	shoe	za	za ⁵⁵	za ⁵⁵
1.026	bag	—	—	—
● 1.027	sword	bu-cha/gha-mi	—	—
(	chopper		ku ³³ mi ⁵⁵	jo ⁴⁴ mi ⁵⁵
(	knife		bu ⁵³ tɕa ³¹	bu ⁵⁵ tɕa ³³
? 1.028	spear	mtö	—	—
◎ 1.029	gun	niao-ch'u	næ ³¹ ntshu ⁵⁵	nɛ ³³ ntshu ⁵⁵
● 1.030	bow	li-bgu	li ⁵³	gu ⁵⁵
● 1.031	arrow	li	khu ³¹	li ⁵⁵
? 1.032	stick	ngo-t'u	s ¹³¹ bu ⁵⁵	tɛ ⁵⁵ tɛ ⁵⁵
○ 1.033	house	yü	ju ⁵⁵ lu ⁵³	ji ⁵⁵ ly ⁵⁵
○ 1.034	door	k'u	qhuo ⁵⁵ bu ⁵³	qho ³³ bu ³³

? 1.035	thatch	ja	—	—
1.036	floor	—	—	—
1.037	post	—	—	—
? 1.038	plank	shi-pia	ndæ ³¹	—
◎ 1.039	horse	mu	mo ⁵³	mo ⁵³
? 1.040	buffaloe	nje-ghö	—	—
● 1.041	cow	ghö	khuæ ³¹ æ ¹³¹ mi ³⁵	—
(	cattle		ɾæ ³¹	ɾæ ³¹
◎ 1.042	pig	va	væ ³¹	va ³³
● 2.043	goat	yü	tshl ⁵³	tshl ³⁵
(	sheep		jo ⁵⁵	jo ⁵⁵ tshl ³⁵
◎ 2.044	dog	chö	tshl ³¹	tshl ³³
◎ 2.045	cat	ha-la	ɾa ³¹ la ⁵³	xa ³³ la ⁵⁵
? 2.046	chicken	rja	fiæ ¹⁵³	fiæ ⁵³
△ 2.047	chicken's egg	rya-gu	fiæ ¹⁵⁵ ku ⁵⁵	fiæ ⁵⁵ ɾo ⁵⁵
◎ 2.048	bird	ge-ji	ge ⁵⁵ zl ⁵⁵	giæ ⁵⁵ zl ⁵⁵
◎ 2.049	fish	zö	zu ⁵⁵	zu ⁵⁵
● 2.050	tiger	zei	tshuo ³³ dzl ³¹ la ⁵⁵ 吃人的狼	la ⁵⁵
(	panter		zæ ³¹	zl ³³
◎ 2.051	gold	han	hæ ⁵³	hæ ⁵³
◎ 2.052	silver	ngu	ɳu ⁵⁵	ɳu ⁵⁵
? 2.053	copper	t'o-shö	tsl ⁵³ ʃl ⁵⁵ qa ³¹ 黄銅	tsl ⁵³
◎ 2.054	iron	shu	ʃu ⁵³	ʃu ⁵³
◎ 2.055	village	fu-ke	fu ³³ qæ ⁵³	fu ³³ qæ ¹⁵³
△ 2.056	road	je-gu	æ ¹⁵⁵ gu ⁵⁵	æ ¹⁵⁵ gu ⁵⁵
△ 2.057	river	han-tzö	ɬæ ³¹ ndz ¹⁵⁵ qhæ ³¹	ndz ¹⁵⁵ qhæ ³³
◎ 2.058	hill	ga-ku	—	—
(	mountain		nga ⁵⁵ gu ⁵⁵	ge ³³ ku ³³
○ 2.059	field	or	kuo ⁵⁵ æ ¹⁵⁵	ko ⁵⁵ æ ¹⁵⁵ (水田)
? 2.060	paddy	chi	dzi ⁵⁵ po ⁵³	dzl ⁵⁵
◎ 2.061	husked rice	ch'u	ntshu ⁵⁵	ntshu ⁵⁵
◎ 2.062	cooked rice	dzia	ntshu ⁵⁵ dzæ ³⁵	dzæ ³⁵
◎ 2.063	tree	shi-po	sl ³³ po ⁵⁵	sl ³³ po ⁵⁵
○ 2.064	leaf	ship-sö	sl ³³ phsl ³³ /tshl ³³ tshl ⁵³	tshl ³³ tshl ⁵⁵
? 2.065	flower	wet-pu-ch'i	mi ⁵⁵ tɕuo ³¹	mi ⁵⁵ tɕo ³³
2.066	fruit	—	—	—
◎ 2.067	grass	rju	zu ⁵⁵	zu ⁵⁵
◎ 2.068	boat	ngu	ngu ³¹	ngu ³³
○ 2.069	day	nyi	ni ⁵⁵ mi ⁵⁵ ni ³³ gu ⁵⁵	ni ³³ gu ⁵⁵
? 2.070	night	ta-hung	ʔhi ³¹ qhuo ³¹	xɪ ³³ qho ³³
◎ 2.071	fire	mi	mi ⁵³	mi ⁵⁵
◎ 2.072	water	ndzö	ndz ¹⁵³	ndz ¹⁵⁵
○ 2.073	wind	mu	—	mu ⁵⁵ ʃl ³³
? 2.074	earth	tjrö	dzu ⁵⁵ kuæ ⁵⁵	sæ ⁵⁵ zu ⁵⁵ ndzo ⁵⁵ mba ⁵⁵
● 2.075	sand	lu-ka	lu ⁵⁵ zi ³¹	lo ⁵⁵ ʃa ³³
△ 2.076	stone	lu-pi	lu ⁵⁵ qua ³¹	lo ⁵⁵ qua ³³
◎ 2.077	sky	na-k'ang-mo	næ ⁵⁵ nk hæ ³¹ mu ³¹	næ ⁵⁵ nk hæ ³³ mu ³³
● 2.078	sun	he-mi	ni ⁵⁵ mi ⁵⁵	ni ⁵⁵ mi ⁵⁵
? 2.079	moon	hung-ku	ɬi ⁵⁵ mi ⁵⁵	ɬi ⁵⁵ mi ⁵⁵
△ 2.080	star	djrö	tʃl ³¹ (lu ⁵⁵)	tʃl ³⁵
? 2.081	good	p'rö-shu	næ ³¹	ne ³³
2.082	bad	—	—	—
◎ 2.083	big	da-djrö	da ⁵³ dzl ³¹	da ⁵⁵ dzl ³³

○ 2.084 small	a-tzö-tzö	a ³³ ts ¹ ₅₃	ɛ ³³ ts ¹ ₅₅
◎ 2.085 long	da-shö	da ⁵³ ʂa ³¹	da ⁵⁵ ʂa ³³
○ 3.086 short	an-den-de	a ³³ nda ⁵⁵	ɛ ³³ ndɛ ⁵⁵
○ 3.087 tall	da	da ⁵³ mo ³¹	da ⁵⁵ mo ³³
? 3.088 low	a-mu	æ ³³ hi ⁵³	ɛ ³³ hi ⁵⁵
○ 3.089 broad	da-ho	da ⁵³ ɣuo ³¹	dɛ ⁵⁵ qɛ ³³ (路寬)
? 3.090 narrow	a-ke-ke	æ ³³ ɣu ⁵⁵	ɛ ³³ ɣu ⁵⁵ (路窄)
◎ 3.091 hot	tshi	tshæ ⁵³ 天氣~; tshi ³³ æ ³¹	tshl ³³ 水~
◎ 3.092 cold	ga	gæ ⁵³ 天氣~; bo ⁵⁵ 水~	gæ ⁵⁵ 天氣~
? 3.093 heavy	zö	lu ³¹ zæ ³⁵	ɣl ³³
○ 3.094 light	yo	ja ⁵⁵ tshæ (聲調調值缺)	je ⁵⁵ tshɛ ⁵⁵
◎ 3.095 many	da-be	da ⁵⁵ bɛ ³¹	da ⁵⁵ bɛ ³³
◎ 3.096 few	a-nyi	æ ³³ ni ⁵⁵	ɛ ³³ ni ³³
◎ 3.098 near	an-chun	æ ³³ ndɣu ⁵⁵	ɛ ³³ ndɣu ⁵⁵
◎ 3.099 far	do-k'o	da ⁵³ qhu ³¹	da ⁵⁵ qhu ³³
○ 3.100 thick	da	da ⁵³ ɬæ ³¹	dɛ ⁵⁵ ɬɛ ³³
◎ 3.101 thin	a-bi	æ ³³ bi ⁵³	ɛ ³³ bi ⁵⁵
? 3.102 wet	hen-yu	tsuo ⁵³ tsuo ³¹	tso ⁵³ tso ³³
○ 3.103 dry	fu-che	fu ³³ ts ¹ ₃₃ gæ ⁵³	fu ³³ dz ¹ ₃₃ ge ⁵⁵
? 3.104 old(man)	la-mo	vu ³³ dz ¹ ₅₃ 老人	vu ³³ dz ¹ ₅₅ 老人
? 3.105 old(things)	k'a-pe	gæ ³⁵	ge ³⁵
? 3.106 new	sho	s ¹ ₅₅ tsæ ³¹	s ¹ ₅₅ tsɛ ³³
○ 3.107 red	lu	ɬuo ⁵³ ɣuo ³¹	ɬo ⁵⁵ xo ³³
○ 3.108 yellow	shrö	ʂ ¹ ₅₃ qa ³¹	ʂ ¹ ₅₅ qa ³³
○ 3.109 black	na	næ ⁵⁵ nqhæ ⁵³	ne ⁵⁵ nqhɛ ³³
? 3.110 white	p'ri	phu ⁵⁵ lu ³¹	phu ⁵⁵ lu ⁵⁵
? 3.111 I	ngo	ŋa ⁵⁵	ŋa ⁵⁵
? 3.112 thou	nga	nuo ³¹	no ³³
◎ 3.113 one	dji	tɕi ³¹	tɕi ³³
◎ 3.114 two	nyi	ni ⁵³	ni ⁵⁵
◎ 3.115 three	so	suo ⁵³	so ⁵⁵
◎ 3.116 four	zö	z ¹ ₃₁	z ¹ ₃₃
◎ 3.117 five	nga	ŋa ³¹	ŋa ³³
◎ 3.118 six	k'o	qhu ³¹	qhu ³³
◎ 3.119 seven	shö	ʂ ¹ ₃₁	ʂ ¹ ₃₃
◎ 3.120 eight	hen	?h ³¹	h ³³
◎ 3.121 nine	n-gu	ngu ³¹	ngu ³³
◎ 3.122 ten	ho	ɣuo ³¹	ɣo ³³
○ 3.123 hundred	hin	(tɕi ³¹) ?hi ⁵³	hi ⁵⁵
? 3.124 thousand	prö	tu ³¹	tu ³³
● 3.125 three man	ts'o so-ku	*tshuo ³¹ suo ⁵³ ku ⁵³	*tsho ³³ so ⁵³ ku ³³
● 3.126 two horses	mo nyi-ku	*mo ⁵³ ni ⁵³ ku ⁵³	*mo ⁵⁵ ni ⁵³ ku ³³
◎ 3.127 go	bi	bi ³⁵ (將來時)	bi ³⁵
◎ 3.128 come	da	dæ ³⁵	dɛ ³⁵
△ 3.129 ascend	to		lo ³³ to ⁵⁵ 上(山)
(上(~樓)		(duo ³³ ɣuo ³¹) lu ³³ bi ³⁵	)
? 3.130 descend	ts'ö		mi ³³ to ⁵⁵ 下(山)
(下(~樓)		mi ³¹ bi ³⁵	)
3.131 go out	—		
● 3.132 eat(rice)	(dzia)-dzö	*(ntshu ⁵⁵ dzæ ³⁵) dzi ⁵³	*(dze ³⁵) dz ¹ ₅₃
● 3.133 drink(water)	(ndzö)-ndjrö	*(ndz ¹ ₅₃) dz ¹ ₅₅	*(ndz ¹ ₅₅) ndz ¹ ₅₅
3.134 be lost	—		
3.135 bring	—		

?	3.136	fall (from, on the ground)	zö	mi ³³ ndza ⁵⁵ qa ⁵³	mbu ³³ li ⁵⁵ (跌了一交)
△	4.137	fall(from a height)	gu	mi ³³ nGuo ³³ pa ³¹	ngo ⁵⁵ pa ⁵⁵
●	4.138	ride(a horse)	(mu)-tsei	*(mo ⁵³) tsæ ⁵³	*(mo ⁵³) tse ³³
●	4.139	see	lu	nduo ⁵⁵ ʂa ³¹	ndo ⁵³
(		watch		la ³⁵	ly ³⁵)
●	4.140	hear	ba-hi	gi ⁵⁵ ʂæ ³¹	—
(		listen		bæ ⁵⁵ hi ³⁵	bæ ⁵⁵ hi ⁵⁵)
?	4.141	speak	mo-sha	ʂuo ⁵³	ʂo ⁵⁵
●	4.142	fly	bru	mi ³³ ndzu ⁵⁵ ndzu ⁵⁵	fæ ⁵³ ha ³⁵
(		jump		pæi ³⁵	pæi ³⁵)
?	4.143	swim	mbrö	dʒl ³³ dʒu ³⁵	—
?	4.144	laugh	er-drö	dʒl ³³ dʒl ⁵⁵	dʒl ³³ dʒl ⁵⁵
△	4.145	weep	wun-chu	ngu ⁵⁵ ndzu ³³	ngu ⁵⁵ ndzu ⁵⁵
◎	4.146	call	ndro	ndzu ⁵⁵ ndzu ⁵⁵	ndzo ⁵⁵
◎	4.147	sit	ndzö	ndzu ⁵³	ndzu ⁵⁵
	4.148	stand	—	—	—
?	4.149	get up	hen-ta	—	ʂu ³³ tæ ³³ 醒
	4.150	know	—	—	—
?	4.151	read	ndrö	suo ³¹	li ⁵⁵ ndze ⁵⁵
○	4.152	write	rjö	ʒl ³³ ʒl ⁵⁵	ʒl ³³ ʒl ⁵⁵
	4.153	make	—	—	—
	4.154	tie	—	—	—
?	4.155	ask(a question)	na	mi ³¹ tuo ⁵⁵	mi ³¹ do ⁵⁵
	4.156	ask for	—	—	—
?	4.157	place	mien-nai	tʂhi ³¹ pai ⁵³	tʂhi ³³ tʂh ¹³³ 放置
○	4.158	die	shö	ʂl ³³	ʂl ³³ qo ⁵⁵
	4.159	pound	—	—	—
	4.160	cook(rice)	—	—	—
	4.161	grind	—	—	—
?	4.162	pierce	n-gho	luo ³¹ ʔo ³¹	ʔo ³³
○	4.163	be hurt	ngo	ngu ⁵⁵	—
●	4.164	a Chinmaan	o-wa	ʔua ⁵³ /va ⁵³	ʔua ⁵³
	4.165	a Shan	—	—	—
?	4.166	a Tibetan	ghu	phzæ ³⁵ /phær ³⁵	phʂæi ³⁵
?	4.167	a Lo-lo	mu-so	—	—
	4.168	a Lu-tzu	—	—	—
	4.169	a mo-so	—	—	—
?	4.170	a Mu-nia Hsi-fan	mu-nia	—	—
?	4.171	a Miao	mdo	—	—
	4.172	a Li-so	—	—	—
	4.173	a La-hu	—	—	—
	4.174	an A-k'a	—	—	—
	4.175	a Ma-hei	—	—	—
	4.176	an A-ch'ang	—	—	—
	4.177	a Zi	—	—	—
	4.178	a Ma-ru	—	—	—
	4.179	a La-shi	—	—	—
	4.180	a Kachin	—	—	—
	4.181	a P'ön	—	—	—
	4.182	a Burman	—	—	—

まず現代語との対応で問題となる点について検討を加えておく。

次の3例の現代語に共通して現れる最初の音節は、語構成成分として「あたま」を意味する形態素ではないかと考えられる。Davies の記録した語形はいずれもこの音節を除いた部分に対応する。ただし 1.021 hat **t'o-lo** は第2音節が対応しないので△としてある。

○1.008	head	or	Kuo ⁵³ əI ³¹ (lu ³¹)	Ko ⁵⁵ eI ⁵⁵ ly ³³
○1.014	hair	hon	Kuo ⁵³ hũ ³¹	Ko ⁵⁵ hũ ³³
△1.021	hat	t'o-lo	Kuo ⁵⁵ nthuo ⁵⁵	Ko ⁵⁵ ntho ⁵⁵

次も同様の例と考えられるが、〈田〉を意味する語中になぜ「あたま」を意味する語構成成分が含まれるのか、意味上の関連は不明。

○2.059	field	or	Kuo ⁵⁵ əI ⁵⁵	Ko ⁵⁵ əI ⁵⁵ (水田)
--------	-------	-----------	------------------------------------	--

次の11例は Davies の記録した語形は単音節でいずれも現代語の第1音節に対応する。

○1.016	tongue	yi	ji ³³ ɬæ ⁵³	ji ³³ ɬe ⁵⁵
○1.033	house	yü	ju ⁵⁵ lu ⁵³	jy ⁵⁵ ly ⁵⁵
○1.034	door	k'u	qhuo ⁵⁵ bu ⁵³	qho ³³ bu ³³
○3.109	black	na	nae ⁵⁵ nqhæ ⁵³	ne ⁵⁵ nqheI ⁵³
○2.069	day	nyi	ni ⁵⁵ mi ⁵⁵ ni ³³ gu ⁵⁵	ni ³³ gu ⁵⁵
○2.073	wind	mu	—	mu ⁵⁵ ʂ ¹³³
○3.087	tall	da	da ⁵³ mo ³¹	da ⁵⁵ mo ³³
○3.094	light	yo	ja ⁵⁵ tshæ (聲調調値缺)	je ⁵⁵ tshe ⁵⁵
○3.100	thick	da	da ⁵³ ɬæ ³¹	de ⁵⁵ ɬe ³³
○3.107	red	lu	ɬuo ⁵³ xu ³¹	ɬo ⁵⁵ xo ³³
○3.108	yellow	shrö	ʂ ¹⁵³ qa ³¹	ʂ ¹⁵⁵ qa ⁵⁵

次の例は Davies の記録した語形は2音節だが、現代語は3音節でその第1音節と第2音節が対応する。

○3.103	dry	fu-che	fu ³³ ts ¹³³ ga ⁵³	fu ³³ dɬ ¹³³ ge ⁵⁵
--------	-----	---------------	---	---

次の2例の形容詞は、Davies の記録した語形では第2音節を反復させている。孫の文法記述によると、ナムイ語の形容詞には反復形式が有り、反復型はその程度がより深いことを示す。語頭を伴った形容詞の場合、語根のみを反復させ、語頭は反復させない、とあ

り, $\varepsilon^{88} ts^{155}$ <小> に対して $\varepsilon^{88} ts^{155} ts^{155}$ <小小的> という例を挙げている⁽¹⁰⁾。

- 2.084 small **a-tzö-tzö** $a^{88} ts^{155}$ $\varepsilon^{88} ts^{155}$
 ○3.086 short **an-den-de** $a^{88} nda^{55}$ $\varepsilon^{88} nde^{55}$

次の例は第1音節は対応するかも知られるが、第2音節が現代語に対応しない。

- △1.024 trousers **lie-gu** li^{81} li^{83}

語形はいずれも対応するようだが、第1音節の音形が現代語に一致しないものがある。

- ?2.046 chicken **rja** ηa^{53} ηe^{53}
 △2.047 chicken's egg **rya-gu** $\eta a^{55} \eta uo^{55}$ $\eta e^{55} \gamma o^{55}$
 △2.056 road **je-gu** $\partial^{55} gu^{55}$ $\partial^{55} gu^{55}$
 △4.145 weep **wun-chu** $ngu^{55} ndzu^{53}$ $ngu^{55} ndzu^{55}$

次の例では Davies の記録した語形は、黄の記述した語形の第1音節と第2音節に対応するかも知られるが、黄・孫がともに記述している語構成成分の $qhæ^{81}/qhæ^{83}$ に対応する音節がない。

- △2.057 river **han-tzö** $\{æ^{81} ndz^{155} qhæ^{81}$ $ndz^{155} qhæ^{83}$

語形は対応するが、音節頭子音の有聲/無聲が一致しない例。

- △2.080 star **djrö** $ts^{181} (lu^{55})$ ts^{183}

Davies の記録した語形が、現代語の語構成成分の一部のみに対応する例。

- △3.129 ascend **to** $lo^{88} to^{55}$ 上(山)
 △4.137 fall (from a **gu** $mi^{83} nGuo^{83} pa^{81}$ $\eta go^{55} pa^{55}$
 height)

4 記述の精度について

表中で●と印を附した語彙は、◎もしくは○であろうと判断できるが、調査時に誤解や誤認、誤記があったと考えられるもので、若干の説明を要する。

(10) ナムイ語の形容詞の形態については孫宏開『六江流域的民族語言及其系屬分類』(前掲書, p.191)を参考にした。

●1.023 coat ≠ ba-tsö

英語の coat に相当する〈外套〉では黄・孫ともに収録していないが, clothing 〈衣服〉にあたる語(黄) bæ⁸¹ tshi⁵³, (孫) be⁸³ tshl⁵⁵ が對應する。

●1.027 sword ≠ bu-cha / gha-mi

前者は knife 〈刀〉(黄) bu⁵³ tsa⁸¹, (孫) bu⁵⁵ tsa⁸³ に, 後者は黄の記述した chopper 〈斧頭〉 ku⁸³ mi⁵⁵ にそれぞれ一致する。

●1.030 bow ≠ li-bgu li⁵³ gu⁵⁵

●1.031 arrow ≠ li khu⁸¹ li⁵⁵

1.030で Davies 大佐が記録した li-bgu は〈弓箭〉の總稱と思われる。黄は〈弓〉を li⁵³, 孫は〈箭〉を li⁵⁵ としており, 記述に混亂が見られるが, Davies 大佐が1.031で〈箭〉を li とするのは孫の記述に一致する。おそらくこちらが正しいのであろう。

●1.041 cow ≠ ghö

〈母牛〉ではなく, cattle 〈牛〉にあたる語(黄) ɣə⁸¹, (孫) ɣə⁸³ が對應する。

●2.043 goat ≠ yü

〈山羊〉ではなく, sheep 〈羊〉にあたる語(黄) jo⁵⁵, (孫) jo⁵⁵ tshl⁸⁵ が對應する。

●2.050 tiger ≠ zei

〈虎〉ではなく, panter 〈豹〉にあたる語(黄) zæ⁸¹, (孫) zl⁸³ が對應する。

●2.075 sand ≠ lu-ka

〈砂〉ではなく, 次の2.075 stone 〈石〉にあたる語(黄) lu⁵⁵ qua⁸¹, (孫) lo⁵⁵ qua⁸³ が對應する。

●2.078 sun he-mi ni⁵⁵ mi⁵⁵ ni⁵⁵ mi⁵⁵

h は n の書きまちがいかタイプミスであろう。

●3.125 three man ts'o so-ku *tshuo⁸¹ suo⁵³ ku⁵³ *tsho⁸³ so⁵³ ku⁸³

●3.126 two horses mo nyi-ku *mo⁵³ ni⁵³ ku⁵³ *mo⁵⁵ ni⁵³ ku⁸³

ナムイ語の文法では, {名詞} + {数詞} + {量詞} の語順をとる。孫の文法記述で挙げるフレーズ2例(〈一個人〉: tsho⁸³ (人) tci⁸³ (一) ku⁸³ (個), 〈一匹馬〉: *mo⁵⁵ (馬) tci⁸³ (一) ku⁸³ (匹))を参考に, 数詞を置き換えて語彙項目の意味内容に對應させた。それゆえ, 黄と孫の語形には * を附してある。

●3.132 eat (rice) (dzia)-dzö *(ntshu⁵⁵ dzæ⁸⁵) dzi⁵³ *(dze⁸⁵) dzl⁵³

●3.133 drink (water) (ndzö)-ndjro *(ndz¹⁵³) dzl¹⁸⁵ *(ndz¹⁵⁵) ndz¹⁸⁵

●4.138 ride (a horse) (mu)-tsei *(mo⁵³) tsæ⁵³ *(mo⁵³) tse⁸³

ナムイ語の文法では, {名詞} + {動詞} の語順をとる。黄と孫の文法記述を参考に, 動作

対象の名詞を添えて語彙項目の意味内容に對應させた。それゆえ、3.132, 3.133, 4.138の3例についても、黄と孫の語形には*を附してある。

●4.139 see ≠ lu

〈看見〉ではなく、watch 〈看〉にあたる語(黄) lu³⁵, (孫) ly³⁵ が對應する。

●4.140 hear ≠ ba-hi

〈聽見〉ではなく、listen 〈聽〉にあたる語(黄) bæ⁵⁵ hi⁵⁵, (孫) be⁵⁵ hi⁵⁵ が對應する。

●4.142 fly ≠ bru

〈飛〉ではなく、jump 〈跳〉にあたる語(黄) pæi³⁵, (孫) pei³⁵ が對應する。

●4.164 a Chinaman o-wa kua⁵³ / ya⁵³ kua⁵³

? 4.166 a Tibetan ghu phzə³⁵ / phæi³⁵ phşəi³⁵

〈漢族〉o-wa については、2音節の語として聞いたという点を除けば、[kua⁵³]に類する音形の表記としては無理ではない。しかし〈藏族〉をghu とするのは奇妙な語形で、説明がつかない。現代語の呼稱は現地でプミ語を話すチベット人の自稱に一致している。これに對してチベット語カム方言を話す人びとはka⁵⁵ mi⁵⁵ と呼ばれているとのことだが、この語形にも對應しない⁽¹¹⁾。

以上、若干の誤謬を訂正した上で今一度對應状況について整理するなら、151語中、◎が49例(ほかに◎に準ずる●が15例)で計42%、○が25例(ほかに○に準ずる●が3例)で計19%、△が10例で7%、?が49例で32%である。現代語との對應が確實と思われる◎と○の語例を合計すると61%を占めることから、Davies の記録した語彙はナムイ〈納木義〉語(の一方言)であったとみてまず間違いないであろう。

残念なことに Davies の記録では、發話協力者に關する情報や言語調査をどのように行なったかについての具體的な言及がほとんどない。旅行記の本文には一行のなかにHuang-hsin-chai という名の中國人の通譯がいたという記述があるので、おそらく彼を介しての(場合によってはさらに現地の中國人の協力を得ての)調査であったことが想像できる。とはいえ語彙の採集と記録は Davies 自身が行なったらしいことは附録第8章に記載があり、巻末の對照語彙表について説明した部分には、調査時の聞き取りと表記に苦勞した旨の注がつけられている⁽¹²⁾。

(11) 木里藏族自治州縣のチベット人の呼稱は孫宏開〈六江流域的民族語言及其系屬分類〉(前掲書, p.196)による。

(12) 同行の中國人通譯が活躍した話が YÜN-NAN, CHAPTER XXXI p.235—244. (日譯書:300—311頁)に見える。また言語の聞き取り調査については、「教育を受けていない少數民族から正確な語彙を收集するのは困難なことがらであり、[この表には]誤解による何らかの誤りも含まれているに違いない。初めて聞いた言語の音を正確に表記するのもやはり困難なことだが、不可能とい

5 民族呼稱と言語名

Davies 大佐一行が No-po 〈保波／腦堡〉で出会った Hsi-fan 〈西蕃〉と呼ばれている民族について、Lu-ning-ying 〈爐寧營〉地区の人々は Mu-nia で、No-po の住民は自らを Lo-p'u と呼んでおり、翌日には Êrh-su そして Balamin と呼ばれる二人の新たな西蕃の部族に出会ったと記録していることは本稿の第1節ですでに述べた。ここでは、これらの民族呼稱を検討し、なぜ Davies がナムイ語を Mu-nia の言語だと誤認したかという問題について考えてみたい。

木里藏族自治縣は多民族の雑居している地域であり、現地のエスニックグループ間の自稱と他稱が非常に錯綜しているため、整理して提示するのは容易ではない。謝建猷〈木里多語社區〉によれば、チベット〈藏〉族、イ〈彝〉族、漢族、ミャオ〈苗〉族、モンゴル〈蒙古〉族、ナン〈納西〉族などが居住し、12種類に及ぶ言語が話されているとのことである¹³。

まず No-po 〈保波／腦堡〉の住民は自らを Lo-p'u と呼んでいる、という点について。現代の現地調査の報告には Lo-p'u に相当する民族呼稱の記述は見えない。かりに民族（エスニックグループ）名だと考えると、彝族のなかに自稱を lo lo pho という人びとがいるけれども、この自稱を使うのは雲南省中部で中部方言を話す彝族であり、四川省の彝族は北部方言に属し、自稱は no su に類する語形である。また No-po での記述において Davies は彝族について何も言及していない。YÜN-NAN の民族誌で Davies は彝族について詳細に論述しているので、もし彝族の族稱だとすれば、必ずその旨の記述をしたに違いない。また民族呼稱以外の可能性としては No-po という地名の現地の民族語による発音ではないかと考えられる。漢語の西南官話では聲母の [l-] と [n-] は區別されない¹⁴ので、民族語の Lo-p'u という地名が漢語の発音で No-po となったとしても不思議ではないが、今は不明とせざるを得ない。

つぎに Êrh-su と Balamin であるが、前者の Êrh-su は、自稱を əɿ⁵⁵ su⁵⁵ といい、アルス〈爾蘇〉語という獨立した言語を話すエスニックグループがあり、その言語については孫宏開が調査している。後者の Balamin とは、現地でプミ語を話すチベット族から

うわけではない。幸いその言語の會話には欠かせない微細な發音上の違いも、文獻學的比較研究が目的の場合には、絶対に必要だというわけではない」と述べている。YÜN-NAN, APPENDIX VIII THE TRIBES OF YÜN-NAN Footnote 1, p. 337. (日譯書：付録第8章 注(145) 512頁)

(13) 謝建猷〈木里多語社區〉(《民族語文研究新探》四川民族出版社1992年)。なお同論文にはナムイ〈納木義〉語とムニャ〈木雅〉語についての記述はない。

ルズ〈呂蘇〉語（孫の位置付けではアルス語西部方言，黄は獨立の言語とする）を話す人に對する呼稱の bu⁸⁵ lā⁵⁵ mi⁵⁵ にちがいない⁽¹⁴⁾。

このように Davies が No-po 〈俣波／腦堡〉で出會った民族の呼稱に特に注意を拂って記録していることから考えると，この誤認は單純な誤りではなく何らかの根據があつての判斷の結果だと思われる。Davies 大佐一行が訪れた當時，Lu-ning-ying 〈爐寧營〉地區には實際に Mu-nia と呼ばれる人びと（あるいは自分の出自を Mu-nia と稱する者）がいて，Davies はその者の言葉を Mu-nia 語だと思い込んで記述したのであろう。そうすると，誤認の原因としては，彼らの他稱もしくは自稱に基づいたというふたつの可能性が出てくる。

他稱に基づく誤認だとすると，Davies がインタビューした現地の人は Lu-ning-ying 〈爐寧營〉地區に住むムニャとナムズを區別せずに混同していずれも Mu-nia と呼んでいて，No-po 〈俣波／腦堡〉の住民とは異なる言語を話していたことから，Davies はそれを Mu-nia の言語であると判斷したものと考えられる。

いっぽう自稱に基づく誤認だとするとナムイ語を話す者のなかにも自稱（出自）を Mu-nia だとする者がいたと考えなくてはならない。そうすると現代語の調査報告にあるナムイ語を話す人びとの自稱がナムイまたはナムズであるという事実をどう考えるかが問題になるけれども，出自や自稱と話している言語とが必ずしも一致しない例は少なくない。こと「ムニャの出自」に関しては，筆者自身かつて次のような例に遭遇している。

1988年に青海省海南藏族自治州貴徳縣のチベット語と漢語の方言を調査した際，發話協力者をつとめてくれたチベット人のム /mə/ さんは，漢姓を〈乜〉といった。珍しい姓なので由來を聞くと，出自がムニャなので，その最初の音を取って姓としたものであり，故郷にはいくつか同姓の村があるけれども，ムニャ語を話す者は誰もいないとのことであった。また1998年に四川省康定縣で佛教寺院の取材に御協力頂いた活佛のドジェヂャシ rDo rje bkra shis 師も自らの出自はムニャだが，數代前からムニャ語は話せなくなっていると語っていた（師の母語はチベット語カム方言であった）。

以上，限られた情報からの推論にすぎないが，Davies が調査を行なった No-po 〈俣波，腦堡〉はムニャ語の話されている地域に近く，また三代さかのぼっただけでもムニャの勢力範圍が相當に廣い範圍に及んでいたらしいという事實を考え合わせるならば，現地

(14) アルス〈爾蘇〉語については，孫宏開〈六江流域的民族語言及其系屬分類〉（前掲書，p.125—139）に記述がある。Bu lan mi という呼稱については，p.196 のシヒン〈史興〉語の解説も参照。いっぽう黄と仁増の報告では「ブミ語を話すチベット族は，ナムイ語を話す人びとのことをアルスと呼んでいる」と述べている。黄布凡・仁増旺姆〈呂蘇語〉（《藏緬語十五種》前掲書，p.135—152.）

で Mu-nia と呼ばれていた者、または自分の出自（すなわち自稱）を Mu-nia だと稱する者に一行が遭遇していたとしても不思議ではない⁽¹⁵⁾。

おわりに

以上の検討により、Davies がその著書 *YÜN-NAN* で Mu-nia の言語として記録した語彙は、ナムイ〈納木義〉語（の一方言）であることが明らかになった。記述された言語はムニャ〈木雅〉語ではなかったけれども、この誤認は Davies の調査の資料的価値を減ずるものでは決してない。Davies 大佐一行が雲南省から四川省にかけての地域を探検してちょうど100年の時間が経過しており、当時の記録と現代語との対応を検討することによって、その一致と齟齬が判明するとともに、当時の言語環境の一端を伺い知ることができた。

しかしわずか151語の断片的な単語の記録から知り得る内容には限界があり、現代語の資料との差異がいかなる原因に由来するものなのか、記録の精度によるものなのか、約100年という時間に生じた単語の用法や音韻の変化を反映しているのかといった問題の解答を見出すことは困難である。現代語と対応しない来源不明の語彙については、同地域の言語の記述研究の更なる進展を待たなくてはならないが、近隣諸語との交流や接触による借用の可能性なども視野に入れつつさらに検討を進めていきたい。最も理想的な検証法は、本稿で作成した現代語との対照語彙表を現地に持参し、一致をみなかった語彙を中心に再チェックを行なうことである。

本稿が今後の記述研究の一助となれば幸いである。

【付記】 本稿は平成9～10年度文部省科学研究費補助金奨励研究(A)「西番譯語の言語地理學的分析」（課題番号：09710381）による研究成果の一部として、1999年6月4日に京都大學人文科學研究所文獻班研究會にて報告した内容に基づき、増補改訂を加えたものである。さまざまな角度からコメントを下された班員諸氏に御禮申し上げるとともに、原著の所在について御教示いただいた金文京教授には記して謝意を表したい。

(15) 「川西民族走廊」地域において歴史的にムニャ〈木雅〉の勢力範囲が現在よりも相當な廣がりをもっていたことについては、格勒《論藏族文化的起源形成與周圍民族的關係》（前掲書，p. 406—423）を参照。三世代前のムニャ語の使用範囲の記憶については黃布凡〈川西藏區語言關係〉（前掲書，p. 145）による。